

最強を従える者

マスターM

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

マサラタウン出身のスバルは旅立ちの日に親の都合でハウエン地方に引越す。オーキド博士からヒトカゲ、オダマキ博士からキモリをもらいハウエンリーグ、リーグチャンピオンとなりカントーリーグでもリーグチャンピオンとなり、カントー四天王とチャンピオンを倒しカントーチャンピオンとなるがハウエンリーグ出場の為にチャンピオンを辞退する。二度目のハウエンリーグ優勝を果たしカントーと同じく四天王、チャンピオンを倒しハウエンチャンピオンになる。そして次の地方をカロスに決め、カロス地方へと旅立った。

ポケモンを書きたくなり書き始めました!!モチベーションを上げるための息抜き作品として投稿します。

目次

プロローグと主人公紹介	1
最初の仲間	4
ハクダンジム戦	9
シトロンの新たな仲間	15
バトルシャトーザクロとの出会い	21
初陣！ケロマツとヒトツキ!!	25
チャンピオン・カルネ登場！	30
コルニとルカリオ登場！	34
ルカリオナイト	39

プロローグと主人公紹介

「ブイ！ブイ！」

子犬型のポケモンイーブイが前足で自分の主人である黒いコートを着た少年・スバルを起こそうとしていた

「ん？どうしたんだイーブイ？」

「ブイ！」

「ああそうだったな、明日にはカロス地方に行くから今日はお前達と遊ぶ約束だったな」

「ブイブイ、イーブイ！」

「何何。もう他の奴らは集まってるから早く来いって、分かった分かったから前足で叩くな」

スバルはイーブイを抱えオーキド研究所に向かって歩き始めた

数分歩けばオーキド研究所に着き庭に向かった

「おい皆々来たぞ!!」

スバルが声を掛けるとスバルのポケモン達が集まって来た

「お、来ておったかスバルよ」

「オーキド博士こんにちは。明日からカロス地方に行くので預けているポケモン達の面倒をお願いします」

「任せておけ何時でも行けるようにコンディションを整えておくぞ」

「それであの2人は？」

「さつき終わったばかりじゃ。問題はない今回もリーグでの活躍に期待しておるぞ」

「ありがとう博士。早速迎えに行くよ」

スバルは研究所に入って行き最初の相棒達がいるリビングに向かった

「2人とも準備は大丈夫か？」

「リザー！」

「ジュカ！」

スバルの言葉にリザードンとジュカインは「大丈夫！」と言った。

2人をモンスタールボールに戻し再び庭に出るとオーキド博士から声を掛けられた

「そう言えばスバルよ、サトシもカロス地方に先日行ったぞ」

「ほうサトシもカロスに・・・楽しみだなカロスリーグ」

スバルはカロス地方の方を向きそう呟いた

翌日カロス地方に旅立つ前にオーキド博士とポケモン達に挨拶をするために朝早く研究所に寄った

「それじゃ博士、皆行ってきます」

「うむ。気を付けるんじやぞ」

スバルはオーキド博士とポケモン達に見送られながら空港に向かった

空港でリザードンとジュカインの入ったモンスタールボールを両手に持ち宣言のような誓いのような言葉を呟いた

「リザードン、ジュカイン。俺達皆で最強の頂きを掴もうな」

その呟きに2人の入ったモンスタールボールは上下に揺れた

「よしカロス地方に向かって出発だ！」

今スバルの新たな冒険が始まろうとしている。舞台はカロス地方、スバルは何を掴むか。続く。

主人公設定

名前・・・スバル

年齢・・・13歳

身長・・・165cm

体重・・・60kg

容姿・・・茶髪黒目のイケメン

出身地はカントー地方マサラタウン。サトシとは幼馴染。

旅立ちの日にヒトカゲを貰い家に報告にいったら急遽ホウエン地方への引越しを告げられ、ホウエン地方に引越す。

オダマキ博士からキモリを貰い、ヒトカゲとキモリの3人で旅が始また。その実力は直ぐに発揮されホウエンリーグリーグ優勝と言う栄光を手に入れ、地元カントーリーグにも出場し最終的にカントーチャンピオンとなる。そして再びホウエンリーグに出場しホウエンチャンピオンとなる。

ダイゴからの勧めでカロス地方に行く事になる。

正体がバレないようにサンングラスを常にかけている。

アランと同じ型のメガリングを付けている。ほぼ全てのメガストーンを所持している。

現在の手持ち

リザードン

技・・・かえんほうしゃ、ドラゴンクロー、はがねのつばさ、ブラストバーン

ジュカイン

技・・・リーフブレード、リーフストーム、がんせきふうじ、じしん

最初の仲間

「遂に着いたぜカロス地方」

数時間空の旅を満喫し遂にカロス地方に到着したスバル。

早速プラターヌ博士の研究所に向かおうとしたら声を掛けられた
「その貴方あたくしとバトルしないかしら？」

声を掛けたのは褐色肌に紫がかかった黒髪でエアリーボブにして
白い衣装を着たスバルと同じ歳位の少女だった

「いいですよ。カロスでの初バトルお願いします」

「あら貴方他の地方の方ですか？」

「はい。カントー地方マサラタウン出身のスバルと言います」

「美しいあたくしの美しい名前はジーナ！ですわ！」

ジーナは美しいを強調して自己紹介をした

「えーとジーナさん何処かバトルが出来る場所はあるのですか？」

「敬語は結構ですわ。見た感じあたくしと同じ歳なので。それ
とそこの広場でバトル出来ますわ」

「分かった。ルールはどうする？」

「1対1でどうでしょう？」

「いいぜ」

2人はバトルフィールドで向かい合った

「おい来なさい。フリージオ」

「オー」

「カロスでの初バトルだ行くぞリザードン」

「リザア！」

ジーナはフリージオ。スバルはリザードンを出した

「フリージオ【げんしのちから】ですわ！」

「【はがねのつばさ】で打ち返せ」

げんしのちからをリザードンは器用にはがねのつばさで打ち返し
フリージオに当てた

「追撃だ【かえんほうしゃ】!!」

「【れいとうビーム】!!」

灼熱の炎と氷点下の冷気がぶつかり白い煙がフィールドに広がった

「くっ、これでは手が出せませんわ」

「リザードン右下に向かって「かえんほうしゃ」」

ジーナは動けないでいたがスバルは煙が発生する前にリザードンとフリージオの位置を瞬時に記憶していた。

その時フィールド近くの木の上でカエルのようなポケモンがスバルの事を見つめていた

「ジオ・・・」

かえんほうしゃが直撃しフリージオはボロボロだった

「決めるぞ【ブラストバーン】!!」

ブラストバーンが決まりフリージオは戦闘不能となった

「負けましたわ。貴方お強いのですね」

「ありがとう。ジーナのフリージオも手強かったぞ」

「ありがとうございますわ。そう言えばスバルは何処かに向かう途中でしたの?」

「ああ。プラターヌ博士の研究所に行つて、カロス地方のポケモンのデータをに入れてもらおうと思つていたんだ」

「あらプラターヌ博士に用があつたのですわね。ついていらしやいプラターヌ研究所まで案内してあげますわ」

「ん?ジーナも新人トレーナーなのか?」

「あたくしともう一人は2年前にプラターヌ博士に図鑑を託されたのですわ。現在は弟子兼助手をしていますの」

「成程。じゃ、案内頼むな」

「分かりましたわ」

スバルとジーナが広場から出ようとしたら木の上からカエルのようなポケモンがスバルの前に飛び降りてきた

「このポケモンは・・・」

「その子はケロマツですわ。カロス地方の新人トレーナー用のポケモンの一体ですわよ」

初めてみるポケモンにジーナはカロス地方の御三家の一体とスバ

ルに教えた

「ケロ、ケロケロ！」

「何故だ？」

「ケロケロー！」

「分かった」

「ちよつと何が”分かった”のですの!! スバルはケロマツと話せるのですか!?!」

スバルがまるでケロマツと会話している様に見えてジーナは突っ込んだ

「ああ生まれつきポケモンの言葉が分かるんだよ。何故かは知らないがな」

「驚きですわ・・・まさかポケモンと会話出来る人と出会うとは。それでこの子は何て言っていたのですの?」

「簡単にまとめると・・・バトルして自分の主に相応しいか見せてみるゝって所だな。こいつ自分に相応しくないと思ったトレーナーを見限り続けたみたいだな」

「スバルはこの子のお眼鏡についたと?」

「そういう事だ。さて今度はお前だジユカイン！」

「ジユカ！」

「スバルはジユカインも持っていたのですね」

「ああ、ハウエンの最初の仲間だ」

そう言いケロマツとバトルを始めた

ケロマツは先制攻撃としてあわを出してきた

「切り裂け【リーフブレード】！」

前に進みながらリーフブレードであわを切り裂きケロマツに接近した。ケロマツはあわを止めいあいぎりでリーフブレードを受け止めた

「ジユカ!?!」

「やるなジユカインのリーフブレードを受け止めるとは。じゃ次は【リーフストーム】」

リーフストームを後ろにジャンプし回避したと思ったケロマツの

前にジユカインがリーフブレードを構えていた

「予測通りだ!!止めの【リーフブレード】!」

リーフブレードが決まりケロマツは戦闘不能となった

「さてプラターヌ研究所に行くか」

スバルはケロマツを抱えジーナに言った

「ええこちらですわ」

数十分歩きプラターヌ研究所に着いたスバルとジーナ。スバルを客間に通してからジーナはプラターヌ博士を呼びに行った。この時にケロマツはソフィに預けた。

数分してプラターヌとジーナが入って来た

「やあ初めまして、カントー、ハウエンチャンピオンのスバル君」

「え!?!スバルって2地方のチャンピオンだったのですの!?!」

「ああそうだ。初めましてプラターヌ博士。本日はカロス地方のポケモンのデータをに入れて貰おうと尋ねました。これを」

スバルはプラターヌに自分の凶鑑を渡した

「早速入れてくるよ少し待っててくれるかい?」

「大丈夫です」

プラターヌが部屋を出るとジーナが詰め寄って来た

「スバル貴方どうしてチャンピオンだと言わなかったのですか!?!」

「いや、あんな人が多い所でチャンピオンって言ったら次から次へとバトルの申し込みが来ると思ったからあえて言わなかったんだよ」

「確かにそうですね。そう言えばスバルはカントーとハウエン以外の地方には行っていいのですか?」

「いいや行ったよ。時間の都合上ジム巡りは出来なかったけど、ポケ

モンは捕まえることが出来たよ」

2人が話しているとプラターヌがスバルの凶鑑とカロスの凶鑑そしてモンスターボールを持って入って来た

「お待たせスバル君。このカロス地方の凶鑑に君の凶鑑のデータを全て入れたよ。カロスの凶鑑はホログラムメールが出来るよ」

「ありがとうございます」

「それとこの子を」

プラターヌはスバルにモンスターボールを渡した

「これってもしかして・・・」

「そうケロマツのモンスターボールだ。ケロマツは君を自分のトレーナーに選んだみたいなんだ」

「ありがとうございます。よし出てこいケロマツ！」

「ケロ！」

「これからヨロシクな。俺達で最強を目指そうな」

「ケロ!!」

スバルはカロス最初の仲間、ケロマツを手に入れた。スバルの旅はこれから始まる

ハクダンジム戦

カロス最初の仲間ケロマツを手に入れたスバルは現在リザードンに乗ってハクダンシティに向かっていた。何故ハクダンシティ向かっているかと言うと・・・

数時間前

「そう言えば博士、サトシと言う少年が来ませんでしたか？」

「ああ来たよ今はハクダンシティに向かっているよ。サトシ君とは知り合いなのかい？」

「ええ、旅に出る前まで共に過ごしました。サトシのママさんからサトシが色んな地方を旅したと聞きました。俺はアイツと勝負がしたいです」

「ならハクダンジムに行つてジム戦とサトシ君とバトルをすると良いよ」

「ありがとうございます。また来ます」

「と言いまはリザードンを出し背中に乗ってハクダンシティに向かつて飛んだ」

そして現在

「お、見えてきたなハクダンシティ。まずジムに向かうか」

スバルがハクダンジムに入るとサトシとジムリーダーのビオラがバトルしていた

「【10まんボルト】！」

サトシのピカチュウの10まんボルトがビオラのアメタマのシグナルビームを押し切つてアメタマを戦闘不能にしたところだった

「早速会うとは、中々運がいいな」

「あら？君は？」

スバルの存在に気付いたパンジーが声を掛けた

「あ、ジムに挑戦に来たのですが、先客がいたようですね」

「だったら僕達と一緒に観戦しませんか？」

スバルの言葉を聞きシトロンはそう提案した

「それじゃお言葉に甘えて」

スバルはセレナの横でサトシのバトルを見る事にした

(あれ?この子何処かで・・・)

(この人なんだかスバルさんに似てるような・・・)

パンジーとセレナはスバルの事を気にしていた

サトシとビオラのバトルは最終局面を迎えようとしていた。アメタマを倒した後ビヨンとヤヤコマと戦ったがヤヤコマは倒れ残り
はピカチュウになってしまった。さらにビヨンの【ねむりごな】で
追い詰められた

「止めよ!【ソーラービーム】!」

「ピカチュウ起きろ!」

サトシはピカチュウに呼びかけ起こそうとしているとセレナが大
声で「皆との特訓を思い出して!」と言うとサトシはピカチュウに自
分に向かって【エレキボール】を指示した。そのおかげでピカチュウ
は眠らずに済んだ。そして最後の【10まんボルト】が決まりサトシ
の勝利となった

「おめでとう。私とのバトルに勝ったバグバッチよ。受け取って」

「ありがとうございます。バグバッチゲットだぜ!!」

「ピ、ピカチュウ!!」

「おめでとうサトシ」

「あの、貴方は?」

スバルはサトシに称賛の声をかけた

「何だ?忘れたのか?俺だよ」

そう言いスバルはサングラスを取った

「ス、スバル兄さん!」

「え、サトシのお兄さん!」

「違うよユリーカ、スバル兄さんは俺の実の兄ではなくって兄貴分な
んだ」

「まあ積もる話もあるが先にジム戦をお願いしてもいいですか?」
「ええ」

スバルとパンジーはバトルフィールドで向かいあった

「これよりハクダンジムジム戦を始めます。使用ポケモンは2体、どちらかのポケモンが全て戦闘不能になった時点でバトルは終了します。なおポケモンの交代はチャレンジャーのみ認められます。両者ポケモンを」

「シャッターチャンスを狙うように勝利を狙う。行くわよアメタマ！」

「アー」

「カロス地方最初のジム戦だ。頼むぞジユカイン!!」

「ジユカ！」

ビオラはアメタマを、スバルはエースの一体のジユカインを出した
「バトル開始!!」

「アメタマ【れいとうビーム】」

ビオラは草タイプに効果抜群の氷タイプの【れいとうビーム】を指示した

「ジユカイン【リーフブレード】で切り裂け」

ジユカインは指示を受け【れいとうビーム】を切り裂きながらアメタマに近づき【リーフブレード】で切り裂いた

「嘘!?【れいとうビーム】を切り裂くなんて・・・アメタマ【れいとうビーム】で氷のスタジオの準備」

アメタマはフィールドに【れいとうビーム】を撃ち地面を凍らせた
「氷のスタジオの完成。滑りなさいアメタマ【シグナルビーム】！」

「自分の周りに【がんせきふうじ】だ」

迫りくる【シグナルビーム】を【がんせきふうじ】の岩を自分の周りに落として守った

「【じしん】でアメタマを空中にあげろ！」

ジユカインの【じしん】でフィールドの氷が割れ、アメタマは空中に飛ばされた

「止めの【リーフブレード】！」

空中にいるアメタマに【リーフブレード】が当たり、落下したアメタマは目を回していた

「アメタマ戦闘不能。ジユカインの勝ち」

「ご苦労様。休んで頂戴」

ビオラはアメタマを戻し労いの言葉をかけた

「スツゲー、アメタマが手も足も出せないなんて・・・」

「彼は一体何者なのでしょう？」

サトシは驚きの声をだし、シトロンはスバルの強さに何者なのか考えているとパンジーが思い出したようにその場にいる全員にスバルの正体を言った

「思い出したわ、彼は現カントー、ハウエンのチャンピオンよ」

「チャンピオン!? スバル兄さんが!!」

「まさかチャンピオンだったとは・・・」

「ユリーカビツクリ・・・」

「デ、デネ・・・」

「やっぱりスバルさんだったのね・・・」

一同はスバルの正体を知り驚いていた。セレナの呟きは一同の声で誰にも聞こえなかった

「まさかチャンピオンだったなんて・・・どうして黙っていたの？」

「今の俺は、カントー、ハウエンのチャンピオンではありませんよ。カロスリーグに挑戦する一人のトレーナーです」

「そう。でもチャンピオンと知ったら本気で行くわよ。お願いテツカニン」

「ニン」

「戻れジュカイン。最後は任せたりザードン」

「リザッ」

ビオラはテツカニンを、スバルはもう一体のエースリザードンを出した

「先ずは【かえんほうしゃ】」

「テツカニン【まもる】」

スバルは先制攻撃として【かえんほうしゃ】を指示したが、テツカニンは【まもる】で攻撃を防いだ

【れんぞくぎり】よ」

【ドラゴンクロー】で迎え撃て」

テツカニンは【れんぞくぎり】でリザードンに斬りかかろうとするが、全て【ドラゴンクロー】でふせがれてしまう

「距離を取って連続で【シャドーボール】」

「回転して【はがねのつばさ】」

テツカニンは距離を取り、リザードンの周りを飛びながら【シャドーボール】を連続で撃つが回転した【はがねのつばさ】ではじき返されてしまう

「テツカニンもう一度【れんぞくぎり】」

【ドラゴンクロー】だ」

今度も先程と同じになると思っていると、リザードンの【ドラゴンクロー】が発動する前にテツカニンが【れんぞくぎり】が決まった
「どうしてテツカニンの攻撃が早くなったの？」

「それはテツカニンの特性です。テツカニンの特性はかそくで、速度が増すのです」

セレナがテツカニンの速さに疑問を感じているとシトロンが説明してくれた

「ふむ、早いが1、2撃入れれば行けるな・・・よし行くぞリザードン！」

「リザッ！」

スバルのやる事が分かりリザードンは「分かった」とスバルに言った

「火炎よ龍の力を得よーリザードンメガシンカ!!」

スバルのキーストーンとリザードンの体内にある、リザードンナイトXが共鳴し光で結ばれリザードンの姿を変えた

「メガシンカ！」

「黒いリザードン・・・」

「まさかメガシンカを使うとは・・・」

「リザードンカッコいい!!」

生で見るメガシンカに観戦しているサトシ達は興奮した

「メガシンカしても素早さはこつちが上よ。テツカニン【れんぞくぎり】」

テツカニンは翻弄するかのよう動き回り攻撃の機会を窺っていた。スバルとリザードンは目を閉じ集中していた。そして目を見開き指示した。

「後ろだ！『ドラゴンクロウ』!!」

後ろから攻撃をしようとしたテツカニンに「『ドラゴンクロウ』が決まり、テツカニンは地面に叩きつけられた

「テツカニン！」

「最後だ『ブラストバーン』!!」

炎タイプ最強技の「『ブラストバーン』」が直撃しテツカニンは戦闘不能となった

「テツカニン戦闘不能リザードンの勝ち。よって勝者チャレンジャー
スバル」

「ご苦労さんリザードン」

「リザツ」

スバルが労いの言葉をかけるとリザードンは元の姿に戻り頷いた

「スバル君バグバツチよ受け取って」

「ありがとうございます。一つ目バグバツチ貰ったぜ！」

スバルはビオラからバグバツチを受け取った

こうしてカロス最初のジムバツチをゲットしたスバル。彼の旅は
始まったばかり続く……

シトロンの新たな仲間

ハクダンジム戦を終えスバルとサトシ達はポケモン達の回復と自己紹介を兼ねポケモンセンターに来ていた

「改めて、スバルだ。サトシの3つ上で旅に出るまではサトシの面倒を見ていた。今はカントー、ハウエンのチャンピオンではなくカロスリーグに出場する1人のトレーナーという事で頼むな」

「分かりました。僕はシトロンと言います。でこつちが・・・」

「妹のユリーカです。この子はデデンネ私のキープポケモンなの」

「キープポケモン?」

「ユリーカはまだポケモンを持ってないから、シトロンがユリーカ用にゲットしているのです」

「成程な」

「私はセレナです。スバルさん私の事覚えていますか?」

「セレナ?もしかして昔オーキド博士のポケモンサマーキャンプにいた少女か?」

「はいそうです」

「まさかあんな小さい子がこんな美人になっているなんて、言われなかったら気づいてなかったな」

「そ、そんな美人だなんて／＼／＼」

スバルの言葉にセレナは顔を赤くした

「あ、あの～スバルさんとセレナはこれからどうするのですか?」

何とも言えない空気になりかけたところでシトロンがスバルとセレナにこれからどうするか聞いた

「俺はサトシ達が良いんだったら一緒に旅がしたいな」

「私も」

スバルの言葉にセレナも賛同した

「俺は賛成だぜ!スバル兄さんと旅が出来るなんて思ってもみなかった」

「僕もです。2地方チャンピオンのバトルが見れるのでしたら大歓迎です!!」

「ユリーカも!!」

「デネー!」

サトシの言葉にシトロロンもユリーカも賛成しスバルとセレナはサトシ達と旅する事が決まった。スバル達の今の手持ちの紹介をして再びミアレシテイに戻る事になったスバル達。途中サイホンレーズにサトシが飛び入りで参加したがロケット団によるサイホン強奪事件が起こったが、スバルの活躍で事なきをえた。

そして一行は遂にミアレシテイに着いた

「着いたなミアレシテイ!」

「この前はゆっくり見えなかつたけど、世界のファッションをリードする町ってだけあるわね、町も皆も凄くお洒落。プリズムタワーも素敵」

「そ、そうですね」

「まあまあかな」

「そう言えばプリズムタワーにはミアレジムがあるって聞いたな。サトシもうジムには行ったのか?」

「それがバッチが4個必要みたいで挑戦出来なかつたです」

「へーバッチが揃わないとチャレンジ出来ないジムもあるんだ」

「そう言う訳で取り敢えずこの町は素通りしませんか?」

「シトロロン、ユリーカお前達変だぞ?ミアレに着いてから挙動不審だし何か隠しているな?」

スバルはミアレに着いてから2人の様子がおかしいと思い聞くと2人は誤魔化すように先に進もうとする。そこに2人の父親のりモーネとデンリユウと出会いスバル達も自己紹介をした。

更にシトロロンがミアレシテイジムリーダーだと分かり、今ジムはシトロロンが作ったジムリーダーロボットにジムが乗っ取られたと聞きスバル達は取り戻す為に動いた。

結果的にジムを取り戻す事に成功しロボット・シトロイドに再度プログラムを入れ、理想に近いジムリーダーロボとなった。

そしてりモーネに今までの事を全て話、スバル達と旅をしたいと言いりモーネはこれを承認し5人はシトロロンの家に一晚泊まる事に

なった

「サトシとスバルさんは良かったのですか？ジムに挑戦しなくって」

「シトロンはバッチ4個の実力があるのが良かったんだろ？だったら俺もその実力を付けてからにするよ」

「スバルさんは？」

「俺も同じだ。今はチャンピオンではなくカロスリーグ出場を目指すトレーナーだから、バッチ4個を手に入れて堂々とチャレンジしようと思う。その時の相手はシトロイドではなくシトロンお前だ」

「俺もな」

「はい。その時まで今より実力を付けて正々堂々とバトルします」

そう言いシトロンはサトシとスバルと握手した

翌日セレナの提案でプラターヌ博士に会いに行く事になったスバル一行。

研究所に行くときセレナが焼いたマカロンを食べようとしたが、研究所にいたハリマロンに全て取れられしまった。

それぞれ過ごしていたらロケット団のトレーラーが研究所の庭に突っ込んで来てプラターヌ博士を誘拐した。セレナとユリーカは博士を助けようとトレーラーに乗ったが扉が閉まってしまっ出てくる事が出来なくなった。そしてトレーラーが走っていき、遅れて出てきたスバル達はハリマロンがトレーラーを指さすのを見て、サトシはヤヤコマを出しトレーラーを追う様に指示した

「俺も行く。頼むぞリザードン！」

「グオ!!」

スバルはリザードンを出し背中に乗ってトレーラーに気づかれ無ようにトレーラーの上を飛んで尾行を始めた。

サトシ達はセレナがまいていたマカロンのかけらを辿り追いかけて行った

着いた先は山の中でトレーラーは廃工場の前にあつた

「サトシこつちだ」

「スバル兄さん、ヤヤコマ」

「犯人はロケット団だ。中にはプラターヌ博士とセレナとユリーカが拘束されている。此処は様子を見て、隙があれば動くぞ」

「はい」

「出てこいジユカイン、ケロマツ」

「ジユラ！」

「ケロ！」

「様子を見て隙が出来たら突入する2人は反対側に回り待機してくれ」

スバルの言葉にジユカインもケロマツも頷き反対側に回った。

様子を見ていたがハリマロンがマカロンを取ろうとしているのが見つかり突入する事になった

「皆を返せロケット団！」

「皆を返せ！と言われたら」

「答えてあげるのが世の情け」

「世界の破壊を防ぐため」

「世界の平和をまもるため」

「愛と真実の悪を貫く」

「ラブリーチャミーな敵役」

「ムサシ」

「ゴジロウ」

「銀河をかけるロケット団の2人には」

「ホワイトホール白い明日が待っているぜ」

「ニヤンテナ」

「ソーナンス」

ロケット団は何時もの名乗りを手を抜かずしていたがスバル達はセレナ達の縄を解いていた。逃げようとしたが、メガシンカのデータを入れたメカが起動してしまった。そのメカの名はメガメガメカニヤース

「おお！マーベラス!!何て力強い」

「敵ながら天晴です!!」

「感心している場合ではないでしょう!!」

プラターヌとシトロンは目を輝かせていたがセレナの言葉で逃げる事になったしかしスバルは・・・

「【ドラゴンクロー】で止めろ」

「グオオオオオ！」

リザードンは両手の【ドラゴンクロー】でメカを止めた

「「嘘だー！?」」

その事にロケット団は驚いた

「チツッ!ここじゃ狭すぎる外に出るぞリザードン」

工場内では本来の力が発揮出来ないと思いい外に出る事にした。メカが外に出るとメガバシャーモが膝蹴りをくらわした

「まさかのメガバシャーモニヤー!」

「ほう、メガバシャーモかならこつちもメガシンカだ行くぞリザードン!!」

「バウー!」

スバルの言葉にリザードンは「任せろ」と頷いた

「火炎よ日輪の力を解き放て!リザードンメガシンカ!!」

スバルのキーストーンとリザードンの体内にある、リザードンナイトYが共鳴し光で結ばれリザードンの姿を変えた

「違う姿だ!」

サトシ達はハクダンジムで見た姿のリザードンではないことに驚いていた

「リザードンには2種類のシンカの姿があるんだ。この姿の特性は・・・」

そこまで言った所で急に日が強くなった

「この姿の時の特性は「ひでり」だ今なら炎技の威力が上がる。リザードン!」

「バシャーモ!」

「【かえんほうしゃ】だ!」

メガシンカ+ひでのり効果を得たりザードンとバシャーモの「かえんほうしゃ」がメカに直撃しメカはロボロボになった。

止めにピカチュウの「エレキボール」とハリマロンの「ミサイルばり」がメカの動力源にアタリ爆発しロケット団は空に消えた。

研究所に戻るともう夕方になっており研究所を出発しようとしたらハリマロンがシトロンのについて行きたいとスバルがシトロンの話すと連れて行く事を決めた。

こうしてシトロンの新たな仲間ハリマロンが加わった

バトルシャトーザクロとの出会い

次のジムがあるショウヨウシティに向かうスバル一行

ある日サトシがケロマツと特訓していると、ゲコガシラを連れたい忍者サンペイと出会う。どうやら忍者の村にもスバルの事は知っているようでサンペイはスバルにバトルを申し込んだ。スバルは承認し、リザードン、ジュカイン、ケロマツを出した

「誰と戦いたい？」

「リザードンでお願いするでござる」

「分かった」

こうしてスバルのリザードン対サンペイのゲコガシラのバトルが始まった。

先攻はゲコガシラの【みずのはどう】スバルは【ドラゴンクロー】を指示し【みずのはどう】を斬った。次に【かえんほうしゃ】を指示しサンペイは【えんまく】でゲコガシラを隠した。スバルとリザードンは目を閉じ集中した。

「なにをするか分からないでござるが、これで決めるでござる【でんこうせっか】」

刹那滝つぼからゲコガシラがとてつもないスピードの【でんこうせっか】でリザードンに向かって真正面から突っ込んだ

「今だ【ドラゴンクロー】！」

スバルとリザードンは目をカツと開きタイムラグほぼゼロで【ドラゴンクロー】を発動させゲコガシラを殴りつけた。殴らせたゲコガシラは目を回していた。よって勝者はスバルとなった。その後サトシはサンペイに【でんこうせっか】を教えてもらったが、【でんこうせっか】ではなく【かげぶんしん】となった。

サンペイと別れたスバル達はポケモンセンターで休んだ。因みにポケモンセンターに着く前にスバルはカロス地方2体目の仲間、ヒトツキをゲットした。

次の日セレナが二つ折りのナビでバトルシャトーに行かないか提案してきた。スバル達の話聞いていたニコラとテスラの兄弟と共に

にバトルシャトーに向かった。入口には『バトルシャトー その強さ 爵位で 示せ!』と書いていた

中に入るとメイドが出迎えた。ニコラがテスラのデビュー戦をお願いすると、サトシとスバルもお願いした。サトシの自己紹介が終わりスバルが自己紹介をしようとするのと奥からダンディな男性が出て来てスバルの正体を見破った

「これはこれは、お会いできて光栄です。カントー、ハウエンチャンピオンのスバル様」

「ええ、ええええええ!!」

ニコラとテスラはスバルの正体をしり驚愕した

「今は2地方のチャンピオンではなく、カロスリーグ挑戦するトレナーですよ。それと余りチャンピオンだとは言わないで下さいね」

「これは失礼いたしました。ですが貴方様の爵位は既にグランデューク位の強さがあると思います?」

「デューク?」

爵位を知らないサトシ達にテスラは教えた。最初はバロン、次にヴァイカウント、アール、マーキス、デューク、グランデュークの順に昇格すると

「じゃスバル兄さんは既に一番強い爵位って事か?」

「当たり前じゃない。スバルさんは2地方を制覇しているのよ」

サトシは今のスバルの強さを再確認した

「失礼ですがスバル様、私とバトルをなさいませんか?私に勝てばグランデュークの爵位を贈呈しましょう」

「いいですよ。ですが先にサトシとテスラのデビュー戦にしませんか?2人共ウズウズしていますから」

スバルの言葉によりサトシとテスラのデビュー戦が始まった。サトシはピカチュウ、テスラはヤヤコマでのバトルが始まった。結果はサトシが逆境を跳ね返すパワーで勝利した

「続きまして我が当主イツコン様対カントー、ハウエンチャンピオンのスバル様のバトルを始めます」

ザワザワザワ

メイドの言葉に観客達は驚いた。無理もない余りバトルをしない当主のアイコンがバトルをするのだ。更に相手は2地方チャンピオン、バトルシャトーにいたトレーナー全員が2人のバトルを見るためテラスに足を運んだ

「良きバトルを」

「良きバトルを」

「行くぞリザードン!!」

「グオオオオオン!!」

「頼みましたぞムクホーク」

「ムク、ホーク!」

スバルはリザードンをアイコンはムクホークを出した

「先攻はどうぞ」

「ではありがたく頂きます。ムクホーク【こうそくいどう】です」

「速さをあげて来たか・・・引き付けて【ドラゴンクロウ】」

ムクホークは【ドラゴンクロウ】をギリギリ避け上空に高く上がった

「落下を利用して【ブレイブバード】です」

ムクホークの【ブレイブバード】は落下の勢いとムクホークの特性へすてみでかなりの力となった。リザードンに当たり落下し砂埃で状況は見えないが見ていた者全員はアイコンが勝ったと思った。しかし砂埃が晴れるとすっかり立っているリザードンがいた

「早いな向こうがスピードならこちらはパワー勝負だな。いけるかりザードン?」

「リザツ!!」

スバルの問いかけに「勿論」とリザードンは答えた

「火炎よ龍の力を得よ!リザードンメガシンカ!!」

スバルのキーストーンとリザードンの体内にある、リザードンナイトXが共鳴し光で結ばれリザードンの姿を変えた

「来たぜメガシンカ!!」

「凄いアレがメガシンカか・・・」

サトシは興奮し、テスラは初めて見るメガシンカに感動した

「かえんほうしゃ」だ」

「かげぶんしん」からの「ブレイブバード」です」

ムクホークは「かえんほうしゃ」で消された「かげぶんしん」の分身の後ろかたりザードン目がけて「ブレイブバード」で迫る

「ドラゴンクロー」ではじき返せ」

ムクホークの「ブレイブバード」をリザードンは真正面から「ドラゴンクロー」で迎え撃ち、ムクホークを地面に叩きつけた

「止めだ「ブラストバーン」!!」

「ブラストバーン」が決まりスバルの勝利となりスバルはグランデュークの爵位を手に入れた。

そして最後にビオラとザクロの勝負となり、ビオラはアマタマ、ザクロはイワークを出した。ザクロのイワークの「がんせきふうじ」は中々のもので岩石をコントロール出来ていた。そして勝負はザクロの勝利となりザクロもグランデュークとなった。

ザクロの去り際にスバル達はザクロがショウウヨウシテイのジムリーダーだと知り、サトシは「がんせきふうじ」の特訓を始めた。

余談であるがスバルがチャンピオンだとしり多くのトレーナーから握手やサインを求められた（8割が女性だったとここに記しておこう・・・）

初陣！ケロマツとヒトツキ！！

バトルシャトーからシヨウヨウシテイに向かうスバル一行は途中、ポケビジョンを撮影した。スバルはカロスに来ている事を知られたくない為撮影しなかった。またコウジンタウンの水族館で黄金のコイキング像を見て、本物を吊り上げようとした。帰ろうとした夕暮れ時に黄金のコイキングを目撃し、水族館の館長に釣り竿を貰いシヨウヨウシテイに向かった。

そして遂にシヨウヨウシテイに到着した。

「着いたぜシヨウヨウシテイ！！」

「先ずはポケモンセンターで回復だな」

スバルの言葉に全員頷きポケモンセンターに向かった。

ポケモンセンター

「スバルさん。オーキド博士からお電話です」

ジョーイからオーキド博士から電話と聞き受話器を取った。

「久しぶりじゃなスバルよ、サトシとは会えたか？」

「ええ会えましたよ。それで用件は？まさかこの事を聞くために態々連絡して来たんですか？」

『うむ用件とはイーブイの進化の事じゃ』

「イーブイの進化？もしかしてフェアリータイプに進化ですか？」

『話が早くって助かる。スバルにはイーブイのフェアリータイプの調査を頼みたいんじゃないよ』

「わかりました。ならアイツを送って下さい」

『分かった、直ぐ転送するぞ』

そう言い、イーブイの入ったモンスターボールが転送されてきた。「確かに受け取りました。これからジム戦なので、久しぶりにやりま
す」

『検討を祈っておるぞ』

そう言いオーキドは消えた。

「スバル兄さんオーキド博士と何の話をしてたの？」

「イーブイの進化についてと調査だ。出てこいイーブイ!!」
「ブイ！」

ボールからイーブイはスバルの体を登り頭に乗った。

「可愛い!!」

ユリーカは目を輝かせた。

「よし、シヨウヨウジムに向かうぞ」

シヨウヨウジム

「ようこそシヨウヨウジムへ。スバル君、サトシ君。君達が来るのを首を長くして待ってましたよ。最初はどちらからですか？」

「スバル兄さんお先にどうぞ」

「いいのか？」

「はい」

「ではザクロさん俺から相手お願いします」

「はい。ではルール説明をします。使用ポケモンはチャレンジャーの手持ち全てですが・・・スバル君今君の手持ちは何体ですか？」

「今は5体ですが、今回はリザードン、ジュカインは使用せず、若手でいきます」

「なら、3対3でいいですか？」

「はい」

そしてザクロとのバトルが始まった。

「行け、ウソツキー！」

「ウソ、ツキー」

「ウソツキーか・・・初陣だケロマツ!!」

「ケロ！」

「先攻はどうぞ」

「ならお言葉に甘えて。ケロマツ【みずのはどう】！」

【すてみタックル】

「みずのはどう」を「すてみタツクル」で弾きそのままケロマツに当たった。

「特性いしあたまですか。手強いですね」

「スバル君こそ、初陣のケロマツにしては「みずのはどう」の威力は高いですよ」

「ふっもう一度「みずのはどう」！」

「ウッドハンマー」です」

「みずのはどう」は「ウッドハンマー」で消えた。

「かげぶんしん」

「がんせきふうじ」

「岩に向かって「みずのはどう」だ」

「かげぶんしん」を消そうと「がんせきふうじ」を指示したのを聞いてスバルは岩に向かって「みずのはどう」を指示し、岩に当たり煙で包まれた。

「ウソツキーあの影に向かって「すてみタツクル」です」

煙の中でケロマツの影に向かって「すてみタツクル」を指示したが、その影はケロムースだった。

「な!?ケロマツは何処に・・・」

「今だ「みずのはどう」！」

ウソツキーの真上から「みずのはどう」を撃ち、ウソツキーは混乱した。

「ウソツキー「もろはのずつき」です」

「ウソッウソッ」

ウソツキーは混乱で自分を攻撃した。その隙を見逃すスバルではなく決着を付けようとした。

「ケロマツ止めの「ねっとう」」

「ケロー！」

近距離で「ねっとう」を受け、ウソツキーは戦闘不能となった。

「戻れウソツキー。お疲れ様でした」

「ケロマツ戻れ。次はお前だヒトツキ初陣!!」

「ヒト」

「なら私は・・・行けイワパレス」
「イハ」

「今度はこちらから行きます。イワパレス【がんせきほう】」
「てっぺき」だ」

ヒトツキの特性ノーガードによって攻撃は必ず当たるので、スバルは防御力を上げた。

「続けて【シザークロス】」

「れんぞくぎり」だ」

【シザークロス】と【れんぞくぎり】の猛攻を制したのはイワパレスだった。

「【がんせきほう】」

【がんせきほう】を受け、ヒトツキはボロボロになりながらまだ諦めてなかった。

「よし【つるぎのまい】から【かわらわり】だ」

「イワパレス【がんせきほう】です」

二段階上げた攻撃力の【かわらわり】で【がんせきほう】を割りそのままイワパレスにも当たった。イワパレスは地面に叩きつけられ目を回していた。

「【つるぎのまい】でやられましたね」

「戻れヒトツキ。最後はお前だイーブイ！」

「ブーイ！」

「行きなさいメレシー」

「メレ」

【パワージェム】

【スピードスター】で迎え撃て」

2つの技はぶつかり煙が発生した時にイーブイは動いていた。煙が晴れるとイーブいの姿はなかった。

「イーブイが消えた!？」

「ピイカ〜!？」

「どうなっているの!？」

「もしかして・・・」

サトシ達は驚いていたが、シトロンは心当たりがあった

「今だイーブイ!」

「ブイ!」

「メレ!?!」

メレシーの下からイーブイが出て来て、メレシーにダメージを与えた。

「あなをほる」ですか。ですがいつの間に指示をしたのですか?」

「スピードスター」を指示した後に目が合い、その時少し頷いたんですよ」

「まさかそれだけで分かったと言うのですか!?!」

「ええ、まあコイツとは長い付き合いなので、これくらいは造作もないですよ。勿論リザードンやジュカインも同じです」

「成程手強い相手ですね。ではこれはどうです【ムーンフォース】」

「シャドーボール」

「続けて【ストーンエッジ】」

「かわして【アイアンテール】」

【ムーンフォース】と【シャドーボール】は互角ですぐさまザクロは【ストーンエッジ】を指示したが、イーブイは避けメレシーの頭に【アイアンテール】を当てた。その際急所だったのか戦闘不能となった。

「私の負けですね。ですがいい経験になりました。ありがとうございます
ましたスバル君」

「こちらこそありがとうございます」

スバルとザクロは握手し、スバルは2つ目のバッチウオールバッチを手に入れた。

サトシも【がんせきふうじ】ふうじと【りゅうせいぐん】ふうじで無事ウオールバッチをゲットし、一行はシャラシティジムがあるシャラシティに向かった。

チャンピオン・カルネ登場！

シヤラシテイに向かい旅をするスバル一行はある町の掲示板でカロスチャンピオンカルネがバトルすると分かりスタジアムに向かった。

「悪いが先にポケモンセンターに寄ってもいいか？」

とスバルが言いポケモンセンターに向かった。

「オーキド博士。サーナイトを送って下さい」

『分かった。直ぐに送る』

スバルはシトロン達からカルネのパートナーがサーナイトと知り、同じサーナイトにも試合を見せようと思い、サーナイトを送ってもらったのだ。

そして会場に向かった。

カルネに会おうとカルネの控室に向かったのだが多くの報道陣がいて、マネージャーが今回は面会も取材も出来ないと言っていて、スバル達は諦め客席に向かおうとしたらカルネの隣の控室からプラターヌ博士が顔をだしスバル達はプラターヌ博士の控室に入った。

サトシが隣の部屋にカルネが居ると聞き早速バトルを申し込もうとしてドアノブに触れようとした瞬間に扉が開きカルネが入ってきた。

「博士お待たせ。あら？他にもお客さんがいるのね」

「本物のカルネさんだ」

「綺麗〜」

「ふふふ。ありがとう。あら？」

ユリーカの言葉にお礼を言っつて、サングラスをかけたスバルと目が合った。

「初めまして。スバルと言います」

「スバルって、カントー・ハウエンチャンピオンのスバル君？」

「自分の事を知っているのですか？」

「勿論よ。会えて光栄だわ」

「自分もです」

そう言いスバルとカルネは握手した。

その後少し話をしてスバル達は観客席に向かった。

カルネのバトルは圧倒的だった。サーナイトとアイコンタクトだけで相手のアブソルの攻撃を避け勝利したのだ。

因みにスバルのサーナイトは色違いの為モンスターボールの中から見ていた。

バトル後カルネは女優の仕事の為既に出ていた。

スバル達はセレナの提案でガトーシヨコラの美味しい店に向かった。

その店は人が大勢並んでいてセレナとユリーカは2人で並ぼうとしたが、スバルも並ぶと言い3人はガトーシヨコラ2個を持ってサトシとシトロンが座っている席に向かった。

「お待たせ」

「疲れた・・・」

「お。早速いただきます」

サトシが1個に手を出そうとしたらセレナに止められた。

「この2個を5人で分けるのよ」

「そ、そんな」

「我儘言わない。スバルさんがいなかったら1個だけだったんだから」

「スバル兄さんがいなかったら？」

「そう。スバルさん凄いなだよ！お店の人に交渉して私達に2個売ってくれたんだから」

「何をしたんですか？」

「スバルさんと握手とサインと記念撮影よ。お店の人スバルさんのファンでスバルさんの事を見破ったんだから」

そうスバルがいたからこそ2個ゲットできたのだ。スバル達が食

べようとしたら正体を隠したカルネも来て6人で2個を分け食べた。その後サトシがカルネにバトルを申し込み、カルネがガトーシヨコラのお礼として非公式のバトルをする事になった。

プラターヌ博士も合流し、カルネのサーナイトVSサトシのピカチュウのバトルが始まった。

ピカチュウは【アイアンテール】【でんこうせっか】【エレキボール】【10万ボルト】で攻撃するが全てアイコンタクトだけで避けられてしまう。

バトル最中にロケット団が乱入しカルネのサーナイトを奪って行った。

カルネはサーナイトの居場所が分かっているのかスバル達を案内すると言い走り出した。

「何でカルネさんはサーナイトの場所が分かるんだろ？」

「それは2人が強い絆で結ばれているからだ。俺もリザードンやジュカインが離れた場所においても、居る場所が分かるんだ。それと同じですよねカルネさん？」

「ええそうよ」

そして遂にサーナイトを見つけた。最初はカルネ1人で行こうとしたがスバルも同行する事になり2人でロケット団の前に現れた。

「サーナイト、私達の絆の力見せてあげましょ」

「サーナ」

カルネは胸のペンダントに触れサーナイトをメガシンカさせ【シャードボール】数発で檻を破壊した。

「流石チャンピオンのポケモンだ。俺達も行くぞサーナイト！」

「サーナ！」

スバルは色違いで黒いサーナイトを出した。

「黒き念力を解き放て！サーナイト、メガシンカ！」

スバルのサーナイトもメガシンカし、白と黒のメガサーナイトが並んだ。

「カルネさん合わせます」

「分かったわ。チェックメイトよ」

「サーナイト、「ムーンフォース」！」

2体の「ムーンフォース」を受けロケット団は空のかなたに飛んで行った。

結局サトシとのバトルは中途半端で終わってしまった。サトシはカルネにカロスリーグで優勝してカルネとバトルすると宣言し別れた。

コルニとルカリオ登場！

シヤラシテイを目指すスバル一行はある森を歩いていた。

「トレーナー見つけた」

ローラースケートを付けた少女がそう言つてスバル達の前に着地した。

「何だ？」

「何か用ですか？」

「99人目は貴方で決まりだよ」

サトシとシトロンが聞くと少女はサトシを指さしながらそう言つた。

「99人？何の話？」

「ピーカー？」

「決まってるでしょ。ポケモンバトル〜！」

何のことか分からず疑問に思っていると少女はバトルだと答えた。

「あたしはコルニ。パートナーは・・・」

少女が自己紹介をしてパートナーを紹介しようとスバル達の後ろを指すと、リュックを背負ったルカリオが身軽な動きでコルニの横に飛んできた。

サトシは凶鑑を開きルカリオのデータを見た。

「手強そうだな」

「ピカー」

サトシとピカチュウはやる気が出ていた。

「あたし達とバトルしてくれるよね？」

「ああ。シヤラジムでのジム戦に向けてトレーニングしたかったからな」

「へーえシヤラジムに行くんだ。貴方達もトレーナー？シヤラジムに挑戦するつもり？」

コルニはスバル達にトレーナーか聞きジムに挑戦するか聞いた。

「ううん。私達はジム戦はしないわ。私と・・・」

「僕はしません。トレーナーであるのは確かですけどね」

セレナとシトロンはそう答えた。

「あ、私はセレナよ」

「私はユリーカ。この子がデデンネでお兄ちゃんの・・・」

「シトロんです。初めまして」

「デデネ〜」

「俺はサトシよろしくな。俺の相棒のピカチュウだ」

「ピカチュウ」

自己紹介をしていない事に気付いたセレナから順に名乗り次はスバルの番になろうとした時にコルニが何かに気付いたのか声をあげた。

「あー！もしかしてカントー、ハウエンチャンピオンのスバルさんですか!!？」

「よくわかったな。一応カントー、ハウエンチャンピオンのスバルだ。今はチャンピオンではなくカロスリーグを目指す一トレーナーって事で頼むな」

「はい分かりました。あたしスバルさんのファンなんです！握手してもらってもいいですか!?!後サインも!!！」

「いいぞ」

コルニはスバルのファンでサングラスしか変装していないスバルに気づき、握手とサインを求めた。人が良いスバルはこれを承認しサインと握手を行った。

あの後スバルと握手してテンションが上がったコルニを落ち着かせ、コルニとサトシのバトルが始まろうとしていた。

「ではこれより一対一のバトルを始める。どちらかのポケモンが戦闘不能になった時点でバトルは終了だ」

「くうう〜！スバルさんに審判してもらえるなんて!!燃えて来た！カ

モーンサトシ！かかってらっしやい!!」

再びテンションが上がったコルニはそう言っ先攻をサトシに譲った。

バトルは【剣の舞】で攻撃力が上がったルカリオが優位にたち、最後は【グロウパンチ】によりピカチュウが戦闘不能になった。

「・・・ピカチュウ戦闘不能。ルカリオの勝ち。よって勝者コルニ」
スバルは最後の【グロウパンチ】は指示なしでルカリオの独断で行われたことに眉をひそめたが、審判の役目を果たそうと口を開いた。

その後コルニがシャラジムのジムリーダーと告白しスバル以外が驚いた。スバルはチャンピオンとしての人を見る目があるので、コルニの事はジムリーダークラスだと推測していた。

その後コルニとルカリオのお腹がなり全員で昼食を取る事になった。因みに食事はスバルとシトロロンが交互に作っており今日はスバルが担当の日だった。勿論スバルのファンであるコルニのテンションが上がったのは言うまでもない。

ユリーカがコルニの左手に嵌めているグローブの石に気付き、コルニはキーストーンと言った。セキタイタウンにあるルカリオナイトをとって来る修行の旅でセキタイタウンに着くまでにバトルで100連勝するとコルニとルカリオはそう決めたそうだ。100連勝を信じられないとセレナが言うと、コルニはスバルがサインしたノートを取り出しスバル達に見せた。そこにはポケモンの手形をスタンプしており、トレーナーの名とどんなポケモンかも覚えていた。

「あー!!そう言えばまだピカチュウからまだ貰ってなかった」

そう言いケチャップをピカチュウの手につけ、ノートにスタンプした。ケチャップを使った事にスバル達は呆れていた。

昼食が終わりコルニは最後の100人目は誰にするか悩んでいた。

そんな時にメガシンカ鑑定団と言う者達がルカリオとピカチュウを無理やりトラックに乗せ、メガシンカの事を話したが、コルニが常識といい雲行きが怪しくなった。

メガシンカ鑑定団の正体はロケット団でピカチュウとルカリオは連れ去られてしまった。しかしコルニが「あたしに任せて」と言い走り出した。

その頃ピカチュウとルカリオは協力して檻から抜け出そうとした。しかしバラバラに攻撃しても効果は無く、合わせ技で檻を貫通させ気球に穴を開ける事に成功した。崖に当たり檻は壊れ落下するピカチュウとルカリオ。ルカリオはコルニのメガグローブをキャッチした。そのタイミングで2体の落下が止まり上昇した。2体が確認すると自分達が乗っているのはリザードンだった。

「ピイカーピ!!」

「アオー!!」

「リザ」

リザードンは近くまで来ていたスバル達の前に着地した。

「ルカリオ!大丈夫?」

「ピカチュウ無事か?」

コルニとサトシはパートナーの無事を確かめた。この時リザードンとスバルはピカチュウ達の前に出てロケット団を牽制していた。「こうなったらバトルにゃ!」

ニヤースの言葉でサトシとコルニはやる気になり、スバルの左右に並んだ。

「コルニの100戦目はトリプルバトルになりそうだな」

「ええ。やりましょうスバルさん!サトシ」

スバルがそう言うのとコルニは上着を脱ぎ、メガグローブを着けた。

「やるぞリザードン」

「リザ」

「いくぞピカチュウ」

「ピカ」

「よろしくルカリオ」

「ガウ」

3人と3体は気合を入れた。

「バケツチャ【シャドーボール】」

「チャチャ〜ブ」

「マイーカ【サイケこうせん】」

「マイーカ」

「ルカリオ【ボーンラツシユ】」

【シャドーボール】と【サイケこうせん】をルカリオは【ボーンラツシユ】を回転させることで防いだ。次にゴジロウは【たいあたり】を指示したが【グロウパンチ】に返り討ちにあってしあった。ムサシは【シャドーボール】を指示した。そこで発動のタイミングを狙ってサトシはピカチュウに【10マンボルト】を指示した。

「ほーら来た。ソーナンス」

「ソーナンス」

ソーナンスは【ミラーコート】で【10マンボルト】を跳ね返し、同時に【シャドーボール】が発射させられた。

「リザードン【かえんほうしゃ】だ」

リザードンの【かえんほうしゃ】により【ミラーコート】と【10マンボルト】を燃やし尽くした。

「決めるぞリザードン【かえんほうしゃ】」

最後はリザードンの【かえんほうしゃ】でロケット団は空に消えて行った。

特に苦戦せずロケット団を撃退したがコルニはスタンプが貰えずシヨックを受けたが、今回は仕方ないとスバルが説得するとコルニは頷いた。

セキタイタウンにスバル達も同行する事になりスバル、サトシ、シトロン、ユリーカ、セレナそしてコルニの6人で向かう事になった。

ルカリオナイト

コルニのルカリオをメガシンカさせるために、ルカリオナイトを求めスバル一行は遂にセキタイタウンに到着した。

「ここがセキタイタウンか」

「ピーカ」

「着いたよデデンネ」

「デデ〜ネ」

最初にサトシが言い同意するようピカチュウも頷いた。ユリーカはポシエツトの中に入っていたデデンネに知らせると、デデンネは欠伸をしながら顔を出した。

「ここにメガストーンがあるのか？」

スバルがコルニに聞くが、コルニは下を見たたままだったので、もう一度声を掛けようとする、突然コルニは顔をあげジャンプした。

「やつと。やつと・・・来た!!」

突然の事にスバル達は驚いたが、コルニはルカリアの手をとってジャンプしている。

「どうとうセキタイタウンに来たんだよ!ルカリオ」

「アオ」

「ポケモンバトルに100連勝して、遂にアンタはメガシンカ出来るんだよ。さあ行こう!」

「待て待て待て待て!ルカリオナイトがどこにあるか知ってるのか?」

走り出したコルニとルカリオをスバルは呼び止めた。

「え?知らないよ。おじいちゃんやんはセキタイタウンに行けば分かるって言ってたし、直ぐに見つかるかなーと思って」

「いやいや。直ぐに見つかるなら有名になってるだろ。俺だって苦労してほぼ全てのメガストーンを揃えたんだからな」

「え?」

「スバル兄さん・・・まさか全てのメガストーン持っているんですか?」

「ほぼな。もしかしたら、まだあるかもしれないしな」

「えーとスバルさん・・・ルカリオナイトは・・・？」
「持つてるぞ」

「じ、じゃあ・・・」

「先に言っておくが渡さないぞ。俺もルカリオゲットしてるし」
「ですよね・・・ってスバルさんルカリオいるんですか!？」

「いるぞ。今は修行で呼べないけど、何時か合わせてやるよ」

「はい!!」

「よし。じゃ聞き込みして、ルカリオナイトを探すぞ」

『おー!!』

スバル達は別れてルカリオナイトの情報を探しに行った。

数時間後スバル達は町の中央に集まった。

「シトロンそっちはどうだった？」

最後に来たシトロンにサトシが聞いた。

「駄目ですね。どの店もルカリオナイトと言う石は知らないと言って
います」

「そんな筈無い。おじいちゃんは確かにここにあるって言ったんだか
らー!」

「落ち着けコルニ。そんなに簡単に見つかるならもっと多くのメガシ
ンカが報告されてる筈だろ？」

「そうですね・・・」

「そこのお嬢さん達セキタイタウンにようこそ。私はその写真館の
マキタ。旅の記念に一枚写真は如何かね？」

「どうするか悩んでいると、マキタ言うカメラマンがアシスタントと
立っていた。」

スバル達は旅の記念として撮ってもらう事にした。

並びとしてはスバルを中心に、左側からルカリオ、コルニ、ス
バル、セレナ、シトロン、サトシの順で前にユリーカだ。

「もうちょっと近寄って」

マキタの言葉で少し間隔を狭めたサトシ達だったが、コルニとセレ
ナは若干スバル寄りになった。

そして初めて全員で写真を撮った。

マキタがアシスタントに大至急でプリントをしてもらっている間に、スバル達はマキタにルカリオナイトの事を聞いた。

マキタの話によれば、山の奥の洞窟の更に奥に行った所に小さな洞窟があるらしいと聞き、そこでは特別な石が採れると聞き目星をつけた。マキタの話は続きがあり、その洞窟は資格がない者が入ると恐ろしい事が起こるらしい。

その話を聞きコルニは飛び出しそうになったが、マキタにまだ写真を貰っていないかったので、受け取ってから山に向かった。

その山ではこっそり盗み聞きしていたロケット団が先回りしており、奥の遺跡に通じる道を巨大な岩で塞ぎ、洞窟に向かっていた。

スバル達は道を進んだが行き止まりだった為引き返していた。

「もう行き止まりなんて、何処で道を間違えたんだろ?」

「私達真っ直ぐきたはずよね?」

「何処かで道を見落としたのかもしれない」

「もー! 洞窟ってどこよ!?! 早くルカリオナイト見つけたいの!!」

サトシ、セレナ、シトロン、コルニの順に言い岩で塞がれた道まで引き返していた。

「ワォー」

ルカリオがルカリオナイトを感じ塞がれた岩の前で止まった。突然止まったルカリオに困惑したが、ルカリオが「グロウパンチ」で岩を粉碎した事で道が現れサトシ達は驚いた。

「ルカリオがルカリオナイトに反応したな」

「どう言う事ですかスバルさん?」

スバルの言いようにシトロロンが聞いた。

「メガシンカするポケモンは、自分のメガストーンを感じる事があるんだ。特にルカリオは波動ポケモンだからな、より強く感じたんじゃないか？」

「アオー！」

スバルの言葉に同意するようルカリオが頷いた。

そしてスバル達はその道を進んで行った。

洞窟前に差し掛かり、中が暗かったためスバルはリザードンを出した。そしていざ入ろうとしたら、ロケット団が飛んで行った。

コルニはルカリオナイトが気になって入ろうとしたらルカリオに止められた。同時にリザードンが唸った事で何かいると警戒しながら洞窟に入って行った。

しばらく進むと半分開いた扉が見え、警戒しながら中に入ると、奥にルカリオナイトが置いてあった。

コルニとルカリオがルカリオナイトを取りに走ると上からバシャーモが現れ、バシャーモの蹴りをルカリオは受け止め、反撃すると、バシャーモはルカリオナイトの前に着地した。その事から、このバシャーモはルカリオナイトの守護者だと分かり、コルニはルカリオと共にバトルを始めた。

最初は善戦していたが強さとタイプ相性で追い込まれたが、気合で立ち上がり両腕で「グロウパンチ」を連打して最後には「ボーンラッシュ」で動きを封じた。

「これでお終いよールカリオそのまま決めちゃって!!」

「アオオオオ!!」

「そこまでー!」

ルカリオの「グロウパンチ」がバシャーモに当たる寸前に制止の声が届き、ルカリオ寸の所で止め切りを見渡した。

制止の声のぬしはコルニの祖父である、メガシンカオヤジ事コンコンブルだった。コンコンブルはコルニの修行の最後の試練としてバシャーモをあてたと言い、その成果を褒め、遂にコルニはルカリオナイトを手に入れた。